

B-147 久能山東照宮の衣服の遺品について、(第5報)

— 徳川家伝来の裁着 —

福島大教育

栗原澄子

目的 安土桃山時代から江戸時代の武家衣服にはどのような種類のものがあつたか、それはどのような裂地で、形態・縫製方法はいかようであつたかをしらべる。

方法 久能山東照宮博物館に收藏されている宝物台帳名では「立付」とされている遺品類17点を対象とした実態調査をした。

結果 調査した袴類17点のうち5点は踏込袴と考えられるものである。他の12点は、後袴が織田信長の革袴・上杉謙信の革袴といわれている袴類の後袴の形態と似ており、袴は紀州東照宮蔵の徳川頼宣の脚衣の袴と似た、久能山東照宮独特の形態の裁着であつた。また、この形態の裁着15点のうち1点は、表地と裏地の間に晒木綿のようなライニングが入れられ、腰紐付けから8cm下つたところより下に釦がとめつけられたものであつた。形態から考えると武技や旅などに用いた袴と思われるが、使用されている裂地は麻・縹木綿・緞子・綿珍・錦など豪華な裂が多く用いられていた。